

理工学部人間総合理工学科／生命・健康科学研究室  
生命倫理、救急救命、健康科学

# 小峯 力 教授

【プロフィール】 小峯 力（こみね つとむ）▷ 神奈川県生まれ。日本体育大学卒業。同大学院体育学研究科修了。87年にオーストラリアにてライフセービング・イグザミナー（検定官）資格を取得。日本初のライフセービング指導者認定を受ける。日本ライフセービング協会理事長、国際ライフセービング連盟（ILS）教育委員、日本臨床救急医学会専門委員、海上保安庁アドバイザーに就任。日本体育大学大学院助手、東京大学医学部看護学校講師、流通経済大学助教授・教授、同大学院スポーツ健康科学研究科教授を経て、2013年より中央大学理工学部教授（法学部兼任）。



**自らの生命を守り、  
他人の生命を救う理論と実践を通して、  
想定外を生き抜く力を育んでいきます。**

救急救命センターで、我が子を水難事故で失った母親の悲痛な叫び声を聞いた体験が、小峯先生をライフセービングの世界に向かわせました。しかし、先生が専門に研究する救命救急は、目の前の生命を救うという行為を超えて、生命倫理と向き合ったさらに深い世界を見つめます。そして、人間の身体状況を測り、水辺の環境を調査・分析する理工学ならではのアプローチから、実践を通じた救急救命の体得にまで学びのフィールドは広がります。そこには、一人ひとりが自ら他人の生命を守る能力と意識を高めれば、大災害時に貴重な生命を失わないという思いがあります。いま最も注目される防災・減災対策、生命教育の確立へ、小峯先生が情熱あふれる研究世界を展開します。

## 2万人の生命の背後に 多くの人の人生がある

救急救命センターで、運ばれた瀕死の人間を前に、皆さんは何を思うでしょうか。「目の前の生命を救いたい」。しかし小峯先生は、そんな一般的な感想にNOを投げかけます。

「私は救急救命の場で『この生命を必要としている人が必ずいる。その人のそばに、この生命を返してあげたい』と考えます。普通、人は死を生の方から見つめますが、私は死の方から生を見つめるのです。例えば東日本大震災にしても、『2万人の死者・行方不明者』とすれば統計的な数字で捉えがちですが、一人ひとりの生命には、その生命を大切にしていた人たちが大勢いるはず。つまり、一つの生命を救うことは、数多くの人たちの人生を救うことになるのです」

したがって、先生の提唱する「ライフセービング」の「ライフ」は、人生とも言い換えることができるのです。

## 水難事故の原因を分析し 予防策に結びつける

毎年のように水難事故のニュースが繰り返されますが、その死がどのようなメカニズムで起きたのか、警察庁も消防庁も原因を調査することはありません。小峯先生は、事故による犠牲者を防ぐという視点から、そのような現状に疑問を呈します。

「事故が起きるのを待っているのでは Drowning Prevention（水難事故予防）になりません。原因を調査すべきなのです。そ

こで、いま学生たちは様々な気象情報を参考に潮流のデータを分析しています。どのような条件で自然の力が働いたときに、人間にどんな影響を与えたのか、どんな状況で溺れたのか。このような分析が進めば、同様のケースでの防止策を立てることができます」

理工学部ならではの知識と技術を駆使した水難事故の調査・分析が行われています。



▲ GPS（全地球測位システム）被験者による海浜流の計測結果の例 / 海水の流れや波の状況を測ることで自然のメカニズムを学ぶ。特に、溺水事故の主要因である離岸流（海岸の波打ち際から沖合に向かって生まれる潮流）を計測する。

## ライフセービングの 実習を通して学ぶ

小峯先生はスポーツ医学の専門家でもあり、様々な運動能力の計測・分析を通して中央大学の学生アスリートたちのサポートも行なっていますが、救急救命においても、この“身体を測る”行為は重要な位置を占めています。



「離岸流のなかで水に流される体験をして、自分の生命に対するリスク・マネジメントを覚えます。苦しみを体験した人間からは『自分のような危険な体験を、他の人にさせたくない』という思いが導き出せるのです。私はこれこそが真の教育だと思っています。このとき、自分が流されている身体の状態を計測します。その数値から、実際に危険に晒された人間の肉体的状況を知ることが、次の対策を立てる際の強いモチベーションになります」

千葉県南房総市。ここに中央大学のライフセービングの実習地があります。実は小峯先生は、この場所で溺れて心肺停止状態になった小学1年生の女の子に心肺蘇生し生命を助けた経験があります。このとき、ご両親から「この子が亡くなっていたら、私たちの人生はおかしくなっていました」という言葉と共に感謝の気持ちが伝えられました。子供を亡くした母親の悲痛な叫び声を聞いて以来30年、小峯先生自身、ある意味での確信を持たれた瞬間でした。

「救急車が到着したのは32分後でした。心肺蘇生は溺水してから3分以内に行えば75%の確率で生命が助かります。ただ4分を超えてしまうと助かっても重い脳障害が残って社会復帰ができないケースが大半なのです。

「このとき実習を受けていた学生たちの中に、いのちの教育をしたいと言って教師になっていった者がいました。実際は心肺蘇生法(AEDも含む)を知らない教員が多くいる現実、生命を預かっているという職業意識が必要です」

小峯先生は、実際に茨城県龍ヶ崎市で、小中学校や保育園勤務の教職員向けに「指導者に求められる救急救命と生命倫理」をテーマに講演活動も行っています。

## 自分と他人の生命を守る 減災・防災教育の重要性

「本当は死ななくて済んだ生命ではないのか。もっと早く逃げられたのではないのか」

東日本大震災の救命現場に立った小峯先生は、遺体安置所から、国民一人ひとりへの防災教育の必要性を痛感すると共に、その現実から講義をスタートさせる。

「まさに大地震の現実、事実、ドキュメンタリーを見せながら、救命から生というものを考えていくのが、防災・減災教育につな

がるに違いないと考え、『生命倫理』の授業では、被災地で撮影した遺体の写真を見せました。『君たちは東日本大震災の報道のなかで、このような写真を見たか』と問うと、ほとんどの学生は遺体一つも見えていない。これは日本の報道規制があるからですが、諸外国では多くの人間が流され沈んでいく場面を見ているのです。私は、死の現実をきちんと見せ、それを心の中心に刻むことで『これは防がないといけない』という思いを引き出せると思っています。堤防の高さを上げて、ハード面だけで全ての人命を救うことはできません。やはり自らの生命を守り、他人の生命を救う能力と意識を高め、ハードとソフトを、車の両輪のように進める必要があります」

そして、先生はいま『生命倫理』の授業のなかで、実際に津波被害が予想される海岸を想定した防災・減災対策のグループワークも進めています。

「巨大地震を想定した防災・減災対策を真剣に考えた学生たちは、確実に自ら生き抜く力、そして他人を助ける意識を育みます。私は、このような講義を義務教育の時期から実践すべきと、多方面に働きかけています」

自然災害に対する国民の意識改革をリードする研究が、中央大学理工学部から発信されようとしています。



▲『生命倫理』の授業風景 / 串本町(和歌山県)など、実際に津波被害が予想される海岸の津波の高さ、到達時間などのデータ収集から開始し、具体的な防災・減災対策までを考える。グループの考え方を、分かりやすく上手に伝える技能も重視される。

### Message ~受験生に向けて~

生命をどう救い、どう守るか、いかに事故を未然に防止できるか、という生命尊厳を中心とした理工学視点を育んでいきます。授業は、理論と実践を通じて、自身の考えを他者へ伝える能力と、自分とは異なる意見を尊重できる力を、プレゼンテーション形式で育んでいきます。

自分の生き方そのものが、誰かのためになるという研究を地道に継続すれば、4年後は、どう生きるかではなく、どう求められるかという視点に立つことでしょう。つまり「Your Happiness is My Happiness」こそ、プロフェッショナルの基本です。